東海村文化祭2026

世界遺産の古典芸能

謡曲と仕舞

（能の謡）

（能の舞）



日時　令和八年十一月一日（日）
　　十五時～十五時五十五分
於　東海文化センター

「能楽」

ユネスコによる人類の無形文化遺産

ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）は世界の無形文化遺産保護の一環として平成十三年五月、歴史・芸術・民族学・社会学・人類学・言語学・文学などの観点から類ない価値を有する伝統的文化の継承と発展を目標として「人類の口承及び無形遺産の傑作の宣言」を行いました。この第一回の傑作として日本の能楽が選ばれました。

「謡」と「仕舞」はこの能楽の主要部分を六五〇年に亘り継承されてきたものです。

晩秋の一時、どうぞお楽しみください。

愛好者を募集してい

（連絡先）

東海観世会　坏　優子
電話　〇二九－二八四－〇五七七

東海宝生会　越島建三
電話　〇二九－二八二－四五九二



主催　東海村能楽会

東海観世会
東海宝生会
金春歩並会

東海村文化祭2026「謡と仕舞」演目の概要

能の演目は以下に示すように五種類に区分されます

①初番目物（脇能ともいいます）	神仏の威徳を讃える能で、神体が主人公です。
②二番目物（修羅能ともいいます）	源平の武将や公達を主人公として、源平合戦を描いた能
③三番目物（鬘能ともいいます）	優雅な女性や花や木の精を主人公とした幽玄本位の能
④四番目物（現在能ともいいます）	狂女物や仇討物、人情物など劇的な曲柄を包含した能
⑤五番目物（切能(尾能）ともいいます）	鬼や天狗などが出てくる能

本日の演目のあらすじと仕舞や連吟として演じられる部分の概要、五種類の区分を以下に示します。

松風（まつかぜ）（三番目物）

旅僧が須磨の浦の塩焼き小屋で宿を借りようと待っていると二人の女が帰って来ました。僧が松風、村雨の旧跡を弔ってきたと語ると、実は自分達はその二人の幽霊で、在原行平との契りが忘れ難くて現れたと話し、形見の衣を着て舞を舞い迹の弔いを頼んで消え失せ、後に松風の音だけが残ったのでした。

仕舞：姉妹の霊が消え失せ、僧が夢から覚めると松に吹く風の音だけが残ったという最後の場面です。

高野物狂（こうやものぐるい）（四番目物）

父の平松殿が亡くなり、子の春満は文を残し出家の旅に出ます。平松殿の家臣高師四郎は、幼主を失い狂ったようになり、旅芸人の姿で、筑波から旅に出て所々を彷徨ううちに高野山に着きます。三鈷ｻﾝｺの松の下で住僧に弟子入りしていた春満に出会い、主従共に出家して高野山で後生を送る身となったのでした。

連吟（謡）：高師四郎が彷徨の旅に出て高野山に着き三鈷の松の下に来たという旅の道中を謡うところです。

清経（きよつね）（二番目物）

平家が西海へ落ち敗戦を重ね、平重盛の三男清経は前途を悲観し豊前(大分県)柳ヶ浦で船から身を投げます。清経の家臣が清経の妻を訪ね、形見の黒髪を渡します。妻は、悲嘆にくれ臥寝した夢の中に現れた清経に先立ったことをなじり、清経は自分の最期を語り、最後は仏に救われたと夢中に消え失せます。

仕舞：清経が、死んで堕ちた修羅道の苦しみを述べ、最後は仏に救われたと言い消え失せる所です。

班女（はんじょ）（四番目物）

吉田の少将は東ｱｽﾞﾏに下る途中、美濃の国(岐阜県）野上の宿の花子という遊女と契りを交わします。少将は東から都に帰る途中野上の宿に寄ったが花子は宿にはいません。花子は都に出て、形見の扇を見ながら狂い出すので班女と呼ばれていました。少将は都で花子と出会い互いに形見の扇を見せ、邂逅を喜ぶのでした。

仕舞：約束の日が過ぎても少将からは便りもなく、逢わないから恋心が募るのだと花子が嘆くところです。

善知鳥（うとう）（四番目物）

諸国一見の僧が立山で一人の老人から外の浜（青森県）で去年死んだ猟師の家にいる妻子に蓑笠を渡すよう頼まれます。僧は外の浜で妻子に蓑笠を渡し、共に回向します。すると猟師の亡霊が現れ、善知鳥を捕らえる様子を語り、その報いで今は地獄で呵責を受けている様を見せ、弔いを頼み消え失せます。

仕舞：善知鳥殺生の報いで地獄に落ちて呵責を受けている様を見せ、弔いを頼み消え失せる所です。

江口（えぐち）（三番目物）

旅僧が江口の里（大阪)で、昔西行が宿を求めて断られて詠んだ歌を口ずさむと、女が現れ断りではなく出家者への遠慮だと言い、江口の君の霊だと明かし消え失せます。僧が弔っていると、水面に遊女の舟遊びが浮かび上がり、仏教の奥義を説き、遊女は普賢菩薩になり、舟は白象となりそれに乗って西の空に消えます。

仕舞：遊女が仏教の奥義を説き、姿を普賢菩薩に変え舟が姿を変えた白象に乗り西の空に消える所です。

歌占（うたうら）（四番目物）

伊勢の神職渡會某は、俄かに頓死して３日して生き返ったが、頭髪は真白になり、歌占いをして諸国を回っていた。渡會の子幸菊丸が諸国を巡歴中にこの歌占いの歌を引き、白髪の男が父であると分かった。幸菊丸の同伴者の里人の頼みに応じて地獄の有様を聞かせた後、親子は伊勢に帰って行くのでした。

仕舞：里人の頼みで地獄の様子をクセ舞いに作り舞うところです。

通小町（かよいこまち）（四番目物）

京の八瀬で夏の修行している僧のもとに、毎日木の実や薪を持ってくる女がいた。僧が女に名を問うと小野小町の名をほのめかし弔いを頼み消え失せます。僧が弔っていると小町の霊が現れ、続いて深草の少将の怨霊も現れ、僧に乞われ少将が小町を慕い百夜通いした様を再現してみせ、やがて小町も少将も成仏します。

連吟（謡）：深草の少将の百夜通いの有様を再現し、小町も少将も成仏するところです。

邯鄲（かんたん）（四番目物）

唐の蜀に住む盧生ﾛｾｲが後生の相談に聖僧を訪ねる途中に邯鄲の里の宿に着きます。夕餉ﾕｳｹﾞの粟飯の炊ける間邯鄲の枕で一睡します。夢の中で盧生は楚王になり栄華を欲しいままにするが、すべてが消え失せ目が覚めます。盧生は万事は一炊の間の夢と悟り故郷に帰ります。

仕舞：夢の中で日夜、春夏秋冬と栄華が巡り、その夢が覚めるという所です。

鵜飼（うかい）（五番目物）

安房(千葉県）の僧が石和川ｲｻﾜｶﾞﾜに来て、鵜使いの老人に出会います。供の僧が前にも鵜使いに逢ったと話すと、老人はその鵜使いは禁漁を犯し殺された、実は自分はその亡霊だと言い、鵜使いの有様を見せ消え失せます。僧が弔っていると、閻魔王が現れ法華経の功力で救われると説くのでした。

仕舞：「鵜之段」と呼ばれる、鵜使いの亡霊が鵜飼の有様を見せ消え失せるところです。

番組

仕舞

観世流　松風　岡野幸子　菊池正之　松本定信　山田宗平　桑山岳三　菱沼郁雄

連吟

宝生流　高野物狂　シテ　菊田益雄　越島建三　高橋秀治

仕舞

観世流　清経キリ　菊池正之　班女舞アト　桑山岳三　善知鳥キリ　菱沼郁雄　山田宗平　松本定信

宝生流　江口キリ　高橋秀治　越島建三　菊田益雄

仕舞

観世流　歌占クセ　松本定信　菱沼郁雄　桑山岳三　山田宗平　菊池正之

連吟

観世流　通小町　夕暮れは何とより　シテ　岡野幸子　山田宗平　松本定信

仕舞

観世流　邯鄲楽アト　山田宗平　菱沼郁雄　桑山岳三　松本定信　菊池正之

宝生流　鵜之段　越島建三　高橋秀治　菊田益雄

付祝言

（主催）東海村能楽会
（協力）桜川観世会
日立雅友会
日立宝生会